

ようこそお参りくださいました。

ありがとうございます。

皆様方はお元気ですか？

9月4日は、二十四節気では処暑でした。

処暑の頃から稲穂が実り、先が重くなってきます。

今年の酷暑の中、お米を作っておいでの方々は、お米の成長をどきどきしながら見守っておられるでしょう。

さて、朝いちばんに仏さまには、お仏飯（おぶくさん）を供えます。

なぜ仏さまに、お仏飯をお供えするのでしょうか。

それは私たちの主食であるお米（いのちの恵み）を仏徳讃嘆のお心をもってお供えするという事です。

私たちは日ごろから様々な物を目にし、多くの量りきれないいのちをいただいて生きています。

私がかんばっているから、生きているのではありません。

犠牲となっていたいただいのちが私を支えてくださっているのです。

そのためにも、まずこの私が合掌し、阿弥陀さまの前に座ることが大切なのです。

一粒一粒に願いがこめられているのです。

今朝も、お供えしたおぶくさんを大切にいただきました。

ちなみに若い方は 仏飯ではなく仏パン

にかわりつつあるのだとか、、阿弥陀さまに食パンですか、、

一昨日 大谷廣榮寺の葬儀。

石川県のある地方では以前、お悔やみを述べる時、遺族の方に「この度は大変な御催促でしたね」と言うことがあったそうです。

ご催促というのは、遅れている仕事を急かせる時に「催促する」という、あの催促です。

肉親を亡くすというのは、大変に寂しいことであると同時に、嫌でも自分自身の死について考えさせられます。

日頃は考えようともしないことを考えさせられるという意味で、「催促」といわれるのでしょうか。

催促に「御」が付くということは、「これも如来のおはからいですよ」という受け止めがあると考えられます。

還骨勤行で御催促。がありました。

還骨勤行で、皆さんと正信偈を唱和しながら、阿弥陀さまの正面に置かれた骨箱を見上げていました。ふとその骨箱から語りかけられているような気がしてきたのです。

「次はあなたの番かもしれませんよ」。それからもう一言、「準備は出来ていますか？」。

ドキっとするよりは、生前の懐かしい口調を思い出し、不思議と穏やかな気持ちになって、「ありがとうございます」と返事をしたくなりました。

思えば私たちは生涯の間、色々なことで準備をします。

保育所では小学校に上がる準備をします。

中学の後半から高校受験の準備、高校では大学受験、大学では就職の準備。

社会人になったら結婚の準備、あるいは次に取りかかる仕事の準備。これだけ色々なことの準備をしていながら、死ぬ準備についてはあまり考えません。

死ぬ準備と言えば、今 はやりの言葉があります。

もう皆さん方はお分かりですよ。

終活。

このごろは何でも略して言うということが、はやりのようにありまして、結婚の活動であれば「婚活」、就職の活動であれば「就活」というわけで、略して言うわけではありますが、今の終活というの、「終末活動」なんですね。

つまり人生の終末を控えて、そこにしておかねばならないことがあるのではないかと。つまり自分の人生、身のまわりを整理する、あるいは片付ける。そういうことで、この終活ということが非常に言われるわけでしょう。

雑誌 家族に迷惑をかけないために、元気な今始める 本当に必要な終活
終活やることリスト。

もはや現在では、行政レベルで終活のサポートをするということが始まっているんですね。

そうかと思いますと、また個人的にもいろいろな終活の動きがあるわけです。

面白いと言うと語弊があるんですけども、大都会では納棺体験というものが大変好評を得ているそうです。

それは葬儀社等の主導で行われるわけですが、納棺ですから、棺の中に入るわけです。

棺の中に入って、いっぺん自分の死を想像してみるということなんですね。

そういうことが大変うけているそうです。

そういうようなことや、いろいろなことがあるわけですが、私どもが終活ということを知りました時に、一番耳にすることは、墓じまい、さらには仏壇じまいという、そういうことをよく聞くわけです。

今日、お集まりの皆さん方の中にも、そういうことを考えていらっしゃるお方がおいでなのではないですか。

自分も墓じまいをしなくてはいけない、仏壇じまいをしていかなきゃならんと。

「子どもはいるんですが、自分が死んだ後、お仏壇やお墓のお守りを若い者に残していくことは、迷惑がかかるから、自分が生きているうちに始末しておこうと思うんです」と、こういうことを言われるのが多いんですね。

私は、そのことを善いとか、悪いとかって言うのではありません。

思っているなら立ち止まって、いっぺん自分に、問うていただきたいのです。

それはどういうことかという、自分がこれまで手を合わせ、お参りをしてきたお墓。

また、朝夕お勤めをして、礼拝してきたお仏壇。

自分が死んだら、もうなくなってもよいようなお墓、お仏壇だったのですか。それを自問していただきたい。

「終活で一番大事なこと」。皆さん方は何だと思われますか。

ある方のお話で出てきた川柳です。

それは、「行く先を告げずに友は逝きました」という一句です。

「行く先を告げずに友は逝きました」。これは行方不明になった、ということではないでしょうか。

そうすると、皆さん、大事な連れ合いなり、親なりが亡くなった。

どこへ逝ったか分からない。行方不明になってしまったということでしょう。

どうするのですか。

やはりその方がおっしゃったとおり、届け出て、捜さなきゃならんわけですよ。

その意味で、「終活で一番大事なこと」というのは、行く先をはっきり告げて逝くということではありませんか。

でしょう。

自分の行く先をはっきり言って逝くということですよ。

ところが多くの方が、先に亡くなった人の逝かれたところが分からない、行方不明にしているわけですから、自分も亡くなったら行方不明になるわけですね。

であるなら、この句にはっきりと答えることです。

「自分がどこへ逝くのか」ということを告げていくことが、終活で一番問われている一大事なのではないか。

死んだら終わりだという、いのちしか生きていないから、返事ができない。

そうすると私は、終活の問題というのは、実は人間に生まれた根本課題、それは何を根拠に生きるのか、という生きる拠りどころと、方向が問われている問題なのでないか。

それがほかならない「あなたは、どんないのちを生きているのか」。それが問われている終活ではないのか。

何か、終活なんて言いますと、お年寄りの話だろうと若い人は言われるかもしれませんが、今申してきた意味からすると、終活は年寄りも、若い者も関係ありません。

私たちに等しく問われている一大事です。

「汝はどんないのちを生きているのか」。死んだら終わりといういのちを生きているのか、それともそうでないのか。これが問われているんですね。

そうすると私は、蓮如上人のお言葉に返せば、これこそが「後生の一大事」ということではないかと思えます。

だからこの終活ということは、蓮如上人のお言葉で言ったら「後生の一大事」がはっきりしたか、ということなんですね。

「この世ではもう二度と会えないだろうという別れ」のことを「今生の別れ（こんじょうのわかれ）」と言うが、この「今生」とは今生きている「現世（げんせ）」のことである。

そして、「前生」は今生の前なので「前世（ぜんせ）」、「後生」は今生の後なので「来世（らいせ）」のことである。

「後生の一大事」というと、また皆さんは死後の話だと思うでしょうが、違うんです。

今、生きているから、後生の一大事が問題になるわけです。

自分はどこへ逝くのか。人生の方向性です。どんないのちを今、生きていますか。これが問われているのですから、まさしく今の問題です。

死ぬ準備と言っても、遺産分けの遺言書を書くとか、自分の葬儀の段取りを付けておくとか、そんなことではありません。

「死んでも死にきれない」という言い方をしますが、そういう無念な思いを抱えて最期を迎えるようなことにはなりたくないと思えます。

「死んでも死にきれない」ということは、言い換えてみると、自分はこんな事のために生きてきたのではない、ということです。

どうすれば死にきることが出来るのか、そのためにどんな生き方をすればいいのか。

それをはっきりさせ、それを生きていなければ、死にきることが出来ないわけです。

今から五百三、四十年前、本願寺第八代の蓮如上人は各地のご門徒宛に、親鸞聖人の教えを説くためのお手紙をたくさんお出しになりました。

いわゆる「御文」と呼ばれるこれらのお手紙の中に、「白骨の御文」と呼ばれる一通があります。

この御文は、例えばお葬式のあと、お骨を拾って自宅へ戻られてからの最初のお参りである「還骨」の時、骨箱を前にして拝読されます。

身近な人の死に触れている方々に、そういう時だからこそ、是非感じ取って頂きたいことが書かれている御文です。

「それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おおよそはかなきものはこの世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり・・・」という書き出しで始まる文章は、その大半が私たちの存在のはかなさを切々と説いています。

一万年生きた人の話など聞いたこともない、百年すら元気な姿で過ごせるものでもない。

朝、艶々の顔をして目覚めたとしても、日の暮れる頃には白骨になっていることだってあり得るのだよ、と。

そして最期の時を迎えるのは、年寄りが先で若い者は後になるという約束のないのが私たちのありさまなのだということを確かめた上で、「たれの人も早く後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏を深くたのみまいらせて、念仏申すべきものなり」という言葉で締めくくられています。

このお手紙で私たちの一生のはかなさが強調されているのは、本当に真剣に考えるべき「後生の一大事」ということを二の次、三の次にしてしまっている私たちのありさまを嘆いておられるのだと思います。

言われてみると、本当にその通りです。今朝目覚めたようにして明日の朝も目覚めることが出来る保証など、どこにもないのです。

保証がないにもかかわらず、それでもやっぱり「いつか機会があったらゆっくり考えよう」という具合にして、先延ばし先延ばしにしています。

私たちは、人としての命を授かった以上、いつかその命を必ず終える時がきます。

ところが、未来は不確かで、命が終わることを除いて、何一つ確かなことなどありません。

また、どれほど理想の人生を描いて、それに向かって歩みを進めたとしても、その理想が確かにかなう保証など誰もしてくれませんし、むしろ理想の実現はないに等しいとさえいえます。

そうだとすれば、常に今この生きているこの一瞬一瞬の歩みが極めて重要になります。

そして、その日々の歩みが、既に理想の完成と重なっている必要があります。

端的には、この現在において、そのことを実現するような教えと出会うことが、私たちの人生においては求められているのだということになります。

『仏説無量寿経』には、お釈迦さまによって、阿弥陀仏の浄土のすばらしさが語られ、無限に輝く阿弥陀仏の大悲心が説かれています。

阿弥陀仏の大悲心とは、煩惱の中で思いのままに生きることができず、いたずらに愚かな行為を積み重ね、苦悩にあえいでいる凡夫こそ、救おうされるはたらきです。

そのことを成就するため、阿弥陀仏は迷いのただ中にいる凡愚に対して、次のような救いの道を示されます。

迷いから逃れ、悟りに至りたいのであれば、我が浄土に生まれたいと願いなさい。

我が浄土に生まれれば必ず仏の悟りに至ることができます。

もし浄土に生まれたいと願うのであれば、我が大悲心を信じて、真実清浄なる心で浄土に生まれたいと欲し、その心を相続して我が名を称えなさい。

必ず仏の悟りへの道は開かれます と。

この阿弥陀仏の凡愚を救おうとの願を受けて、お釈迦さまは私たちに、阿弥陀仏の願いの真意を

「阿弥陀仏の救いの功德の一切は、この南無阿弥陀仏の名号の中におさめられている。

衆生は、ただその名号を聞くだけで、自分は阿弥陀仏の大悲に包まれていると信じればよい。

心から浄土に生まれたいという願いを起こしたその瞬間に、浄土への道は決定します」と、説かれます。

このような意味で、「終わり方が始まり方を決める」というのは、精一杯生きたつもりでいたのに、まぼろしのような生涯だったという空しさの中にすべてが砕け散っていくような人生ではなく、常に今のこの歩みが、人生最高の形で結実することへと繋がるような生き方を見いだすということだと思われま

す。それは、人生の全体が決して空しく過ぎ去ることなく、その終わりが成仏という形で成就していく。

そのことに確かにうなずくことができたとき、常に新たな私の人生のどの一歩の歩みも、すべて空しく終わることのない終わり方につながっていくのだということを物語っているのだといえます。

廣榮寺の伯母さんを見送り、

娑婆の命を終えても、そこで終わりではない。阿弥陀如来の、「必ず救う、我にまかせよ」のはたらきにより、亡きお方は浄土に生まれ仏さまのはたらきをしていかれる。そして、これからも一緒にいてくださる。

命の終わりの受け止め方が、亡き方との新たな出会いの始まりとなるのだろうと感じたことでした。